

じて、人間の残忍さや、旧価値の崩壊を経験したというものの、例えば階級意識等も根強くドイツの社会に定着していて、それが文学にもあらわれ、又著しく抽象的な内容のものが多く現実性にとぼしい従って斬新性を欠く作品が多い。イギリスで失われた一切のタブーはドイツでは失われていない。ドイツ人の持つ理想、計画性、人生についての目的意識等は安定した社会を特徴づける要因である。しかし、戦後のドイツが必ずしも安定していたわけではなく、ドイツ人の国民性に根強い抽象的思考への傾倒が、現実の実相の正確な直視を困難にし、その結果、伝統に執着し、新しさを欠く、作品が生まれたのであろうか。

現代英文学程、社会のありのままの鏡である文学は少く、個々の作家のスケールを小さくした時代の罪に挑戦するが如く、各作家達の問題展開の方向、方法はヴァリエティを持つ。イギリス現代文学の面白さは、新しさに加えてこの多様性とい問題にも起因すると思われる。

不安の根底と宗教の救い

前東北大学学長
慶応義塾大学教授
文学博士

石 津 照 壘

宗教学は間口の広い学問で、色々な専門の研究分野から追求していかねば問題を具体的ににとらえることができない。いわゆる統合的研究ということが今日自然科学の領域でも社会科学の領

域でもいわれているが、宗教の研究においてもことにそのような方法がのぞまれる。ことに最近の宗教学の研究では特定の宗教のことを研究するというよりは、それにそなわる宗教らしさ、宗教的特性を問題にする。したがってまた、この宗教的ということは特定の成立の宗教のなかにおいてでなく、日常経験の或る在り方や或る特殊な状況においてみられるのではないかという問題がでてくる。このような研究傾向において「不安の根底と宗教の救い」ということを述べてみたい。

最近アノミーという語がよくとりあげられている。アノミーとは規範のないことで、学説として元来これはフランス社会学のデュルケムが主張したもののだが、個人がメンバーとしてそのなかに生きている社会の仕組の一角が大きく変わるか崩れるかした場合に、その個人の受けるありさまがアノミーである。ところが最近のアメリカではさらに、現に成員にとつてその社会の客観的な或る仕組が崩壊してはいないが、その仕組があてにならず頼みにならないという心持ちのことから、アノミックな気持とかアノミックな人間性格などということをいう。『孤独な群集』という本などで日本でも知られている。

リースマンは人間の営む生活の基準を西洋の時代的性格を背景にして三つに分け、それに違背した気分をやはり三つあげている。一つは伝統志向型、第二は内面志向型、第三は他入志向型、第一の志向型は封建制のもとにおける人間の意識を決めている標準であり、第二と第三とは近代社会の人人が生きている生活の標準の意識である。第二の内面志向型とは人間の良心や理性がその

行為や考え方を決める規準になっているものをいう。近代社会といえは産業を中心としてみられるが、初期産業社会の特長は生産におかれた。マクス・ウェバーなどもうっているように神の召命として職業にいそしみ、生産に従って将来の幸福を期待して努力するものである。第二の志向型はこの社会に相応するものだという。ところが後期産業社会すなわち現代ではどうかというと、それは消費を特色とする社会である。そのような消費文明の時期における社会意識、人間の価値意識の標準が他人志向型である。それは他人がするから自分もするとか、他人がどう思うかというようなことにもつばら物尺をおいて生きているありさまで、自分というものを留守にして他人のなかに生きているということになる。そこに主体性の喪失やいわゆる自己疎外がある。

ところで、上にあげた伝統志向型において生きている人がその標準にはずれたという意識が恥、内的志向型の標準からはずれたという心持が罪、そして他人志向型において生きている現代の人間がその規準にはずれたとか、はずれはしないかという心持が不安である。

こういうリースマンの分析が充分に科学的かどうかということには問題があるけれども、現代人の意識についてアノミックだとか不安を特長とするとみていることは興味がふかい。精神医学でも現代人の意識を異常な不安にあるといい、それが人間関係にもとづくともいつている。実存哲学などでも不安をやはり現代人の意識の特長としている人たちもいる。

では不安をどのように分析し解釈するか、また、それと宗教的

なこととどのように関係するか。

不安の分析の方向にはだいたい三つある。それはいわば横の關係と縦の關係でみられるが、縦というのはその人の過去との關係で求めるものと将来との關係で求めるものと、この二つである。

不安を学問的に分析した最初の人はフロイドであるが、実験的にやったのはクルト・レヴィンであった。ジョン・ダラードとN・E・ミラーのやった実験なども有名だが、その人たちは過去や将来との關係においてではなく、人の現在の欲求不満や葛藤から分析する。こっちにもゆきたい、あっちにもゆきたいという場合、どちらにもゆきたいという場合、第三にはゆきたいがゆけば危険だという場合で、第三の場合に最もきつい不安がおこる。神経症の場合など、これだという。しかし一般に実験的立場からでは不安のよって来る原因や理由、根拠が明らかにならない。したがってセラピーの問題でもこまるといわれる。

次には、不安の原因や機制をその人の過去との關係から分析するもので、外ならぬフロイトなどの考え方である。フロイトでは、自我の弱さが超自我のことをきくことのできぬ時に不安がおこる。というのは、例のオエディプス・コンプレックスを原型とした幼時経験の複合からなる抑圧された衝動、イド又はエスが無意識のなから自我の足をひっぱる。それで、自我は超自我のいうことをきくことができない。このもつれが不安のもとであるという。

フロイトも新フロイト主義の人々も自己防衛のメカニズム即ち機制が危険にさらされた時に不安が起これるといつているが、新フ

ロイト主義ではこの自己防衛の体系を二つに分けて一つを満足のための防衛体系、他を安全のための防衛体系とする。前者は生理的身体的なものであり、後者は社会関係とくに人間関係におけるものである。この防衛機制が危険にさらされるとき不安が起るのだが、とくに後者における場合がきつ、精神異常等はこちらにもとづくと思われる。

新フロイト主義というのは学説の幅がきわめて広いが、フロイトの原理はいわば形而上的で科学的根拠がうすい。もつと科学的にやらねばというわけで、さきにあげた実験的立場とも呼応して、主体をとりまく環境の何者でもが不安の対象となりうるという。そしてそのなかには次にあげる第三の立場即ち将来的なものととの関係に不安の因由をみるものもある。さらにフロイトのいわば父本位の考え方即ちオエディプス・コンプレクス原理に対して母本位の考えをもつてより科学的だと主張するサリバンの主張等がある。乳児は初めゼロ的存在で、それが母や母の役目をする者によって人格形成を始められる。それが幼児期、児童期等六つの段階において形成されてゆくとのみだが、人間の存在はまさしく「人間相互関係」にあるとサリバンは主張する。精神分析である以上、新フロイト主義の人々も「生活史」をさかのぼって、不安の事実をも乳幼時の経験の複合とみるわけであるが、サリバンなども、やはりこのような人間関係におけるもつれに不安の事実を分析してゆくのである。

このように、精神分析学では不安の現象を人間の過去との関係においてみるのだが、すでにこの立場から第三の、将来との関係

において不安の因由をみてくるものがある。ビンスワンガーやボス等スイスの人々もそうだが、アメリカのモウラーなども興味ぶかい。彼はフロイトの抑圧の考えを高く買うが、超自我と自我とがイドを抑圧するところに不安が成立するのではなく、してはいけないことをしたというところに不安の病因があるとみる。即ち自我とイドとがいつしよになって超自我を抑圧する。ひらたくいえば、良心の苛しやくからきつい不安が生じるとみて、セラピーの方向を哲学や宗教にとつて来る。この立場の考え方は現在いろいろあるが、多くは実存哲学によっているので、いわゆる実存主義精神医学ともいわれている。

そこで、まとめてみると、われわれは日常生活に際して、ああしたい、こうしたいとやっているが、しかし、進退谷まつて如何ともいたしたい状況即ち限界状況とか破局的状況というものにしてしばしば遭遇する。それは社会的にも生理的にもあり心理的にもある。その場合、どうすることも出来ぬ相手というのは、見当がつかず、はかることができない。不確かで、ヘルプレス即ち処置のしようのないものである。だから、こういう相手に対しては全く積極的な適応の手段はない。そこにはきつい不安が生じ、この不安にひきまわされて、人は精神錯乱をおこし、精神異常になる。

ではどうするか。ここに唯だ一つ積極的なアクティヴな方法がある。それは、如何ともしがたいことを、そのとおりに受けとって、それにわが身をまかせることである。このことは真に宗教的な処置という外はないと精神医学者や社会心理学者もいっている。それはどうすることかという、まさに分別の主体を超え、

自己の否定におることである。

ところで、今まで見て来たところでは、不安のよって来たる相手はこのような状況のなかにある如何ともなしたいところの「出来なさ」、「なさ」即ち無だった。ところが、このような「出来なさ」とか「なさ」ということは、人がたまたま違い或いは違わぬでもすむような偶然的なものではなく、実は人間の生きていくことの存在の究極的な根にそなわっている在り方ではないかということが問題になる。

人間存在の主體的な在り方の究極を各自の実存の根底に見出したのは実存哲学であった。実存とは各自の只今の心のゆきわたれる範囲のことだが、それは、ああでもありうる、こうでもありうるという可能性の支配する領域におかれる。そして、それは、実存において存在する主人公の各自にとって、自由自在に支配することの出来ない、思いのままにならない「欠如」や「足りなさ」の在り方においてある。これが実存の構造にそなわる存在論的な無である。不安のよって成立する究極的な根底もここにある。

だから、不安を超えるということは、その究極においてはおわが身にそなわることになる出来なさ、足りなさ即ちいわゆる「負目」を超えることであり、かつそれは、人間存在のギリギリの在りのままのとおりに生きることになる。

宗教的に生きるといことは、実際の場合にはそれぞれの成立宗教における教団のきまりに従って、いろいろな法会や儀式のなかでなされる。しかし、そのような成立的なものの根底を求めて、人間各自の在り方の根底に照らしてみると、まさしく、上のような存在の欠如や負目のとおりに生きることであろうと思われる。

なお、実存哲学において、実存の本来の在り方の考えにふた通りある。一つは自己と自己との関係に実存の在り方をおくもので、他は自己と他者とくに相手の人との関係におくもので、キェルケゴールをはじめハイデッガーやヤスバーズは前の線、マルチン・ブーバーやマルセル或いはスエーデンのルンド神学の人々は後の線で考える。精神医学にもこの二つの考え方が入っているが、たとえば上にあげたサリバンの人間相互関係論などはブーバーの考え方で今日展開されている。それは私とお前との関係で、その関係は連れあうこと、与みしあうことで、医者と患者との関係が同行、同朋というようになっている。

とにかく不安の根底は人間存在の基礎的な在り方にきかれるが、その在り方のとおりに生きること即ち足りなさや欠如のとおりに生きること宗教的な生き方のナマの姿があるように思われる。